

# 平成19(2007)年度斜里町ウトロ遺跡発掘調査報告

豊原 熙司<sup>1</sup>・坂井 通子<sup>1</sup>・松田 功<sup>2</sup>

1. 053-0851 北海道苫小牧市山手町1-2-1, 文化財サポート有限会社 2. 099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49, 斜里町立知床博物館

## Archaeological Excavation Report of the Utoro Site, Shari, Hokkaido, 2007

TOYOHARA Teruji<sup>1</sup>, SAKAI Kayoko<sup>1</sup> & MATSUDA Isao<sup>2</sup>

1. Bunkazai Support Ltd., 1-2-1 Yamate-cho, Tomakomai, Hokkaido 053-0851, Japan. bunkazai104@kxa.biglobe.ne.jp 2. Shiretoko Museum, 49 Hon-machi, Shari, Hokkaido 099-4113, Japan.

### 例言

1. 本報告は、北海道斜里町ウトロ東431に所在するウトロ遺跡(登載番号:I-08-1)の発掘調査報告書である。
2. 調査は、斜里町ウトロ東地区下水道新設工事に伴う緊急発掘調査である。
3. 調査は、平成19年8月1日から8月8日にかけて実施された。調査面積は14.2 m<sup>2</sup>である。
4. 調査主体は斜里町教育委員会、調査機関は斜里町埋蔵文化財センターである。
5. 発掘調査担当者は豊原で、調査員として坂井があたった。
6. 本報告は主に豊原が執筆し、調査に至る経緯を松田が、遺跡の概要を坂井がそれぞれ執筆した。
7. 地形測量図、発掘調査区、土層図には、それぞれスケールを入れて縮尺比を示した。また図示している方位は、すべて磁北である。
8. 遺跡の位置図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「宇登呂」(昭和54年)、「幌別」(昭和51年)の一部を使用した。
9. 発掘調査および遺物整理、本書作成にあたり、つぎの方々から種々のご指導とご教示をいただいた。厚くお礼を述べる次第である。宇田川洋、熊木俊朗、涌坂周一、高橋健、笹田朋孝、伊藤せいち、今井共同漁業部(敬称略)。

このうち出土した土器については、熊木俊朗氏に多くのご教示をいただいた。

10. 整理後の遺物等は、斜里町教育委員会(斜里町埋蔵文化財センター)にて保管している。

### 調査に至る経緯

斜里町ウトロ地区は、国道改良による道路工事が平成12年度から開始され、その後、ペレケ湾埋め立て工事などの国や道による公共事業が実施されている。これらの事業が展開される一方、自治体が行う町道や下水道事業も合わせて実施されるようになり、埋蔵文化財に伴う事前協議が随時行われるようになってきていた。その中で、平成19年6月に下水道本管から今井共同漁業部につなぐ下水道整備について、当事者と町の下水道事業担当者、発掘調査担当者との間で協議を行った。

この結果、サケ・マスの漁期中であれば車両の移動や作業等に支障を来すため、休漁期に工事を行うという条件で当事者と事業担当者とは確認、了承したことにより、発掘調査もその条件下で実施しなければならなくなった。

しかしながら、今年度、斜里町教育委員会(斜里町埋蔵文化財センター)は別事業に伴う緊急発掘調査を実施しており、今回の突発的な作業を割り込ませ、実施することは困難であった。そのため、発掘調査対応が可能な機関、あるいは人材を捜す

ことが急務となった。関係機関と協議した結果、斜里町内での遺跡発掘実績もある文化財サポート有限会社の豊原と坂井の協力により発掘調査を実施することになった。

## 遺跡の概要

### 1. 遺跡の概要と立地

ウトロ遺跡は、知床半島西側となる北緯44°4'16"、東経144°59'40" (日本測地系) に位置している (図1)。この遺跡はウトロ市街地の西側を流れるベレケ川から、半島方向の東側に所在する幌別川までの平坦面を形成している。かつては、ウトロ海岸砂丘遺跡と称されていた遺跡で、今回の調査箇所はこの砂丘西端に位置している。

調査地点は、神社山の西方に流れるベレケ川河口に面して所在しているが (図2)、河口付近の埋め立て等によって現状は大きく変貌している。標高7mを測る。

調査は下水道敷設に伴う幅1m、延長14.2mという狭い範囲であったが、遺構としては調査区西側で続縄文期前半の住居址の一部が検出され、包含層からはオホーツク土器、後北式C1土器、宇津内IIa・IIb式土器、下田ノ沢式土器、続縄文前半・初頭の土器が出土している。

### 2. 土層

発掘区の土層を図4に示す。上層は、埋め立てや住宅建設、私道敷設等によって表土から20-40cmほどが攪乱されている。また包含層も生活排水管の埋設等によって、攪乱箇所が多くみられる。基本的な堆積土層はI層が黒色土、II層が茶褐色土、III層が黒褐色土 (細かなローム混じり) である。

### 3. 遺構

#### a) 1号住居址

##### (1) 調査の経過

発掘区の西端となるベレケ川寄りでは確認された住居址で、東側の壁の一部を検出したにすぎない (図5)。III層 (黒褐色土) を掘り下げていたところ落ち込みが確認され、住居址であることが判明した。

##### (2) 遺構と遺物

III層からの掘り込みであるが、住居址東側の壁付近のみが確認されただけで中央部から西側にかけては攪乱されている。壁際に流れ込んだ汚れたロームが堆積し、その上に焼土が堆積している。また、中央部付近から西側は攪乱されている。

東側の壁際に、長軸50cm、短軸25cm、厚さ13cmの焼土が床面に所在している。この焼土に隣接して北西に延びる焼土がみられる。発掘区域内での範囲は、南北60cm、東西55cmで、厚さは北側で15cm、南になるにしたがって5cmと薄くなっている。

##### (3) 遺物

床面の焼土 (A) からは、続縄文前半の土器 (図6-1) が出土している。胴部破片で、縦位の捺糸文が施文されている。埋土からは図示していないが、続縄文前半の土器片、石器片、骨片が出土している。

##### (4) 小活

検出された住居址は、続縄文前半の時期と考えられる。しかし発掘範囲が幅1mと制約され、西側も攪乱されているために、その一部を検出したにすぎない。

## 包含層出土の遺物

### 1. 土器

出土した土器を図6にしめす。遺物は層位ごとに取りあげているが、オホーツク土器、続縄文土器が混在して出土しており、それらのうち主なもののみ図示した。また続縄文土器の分類は、熊木 (1997) に従った。

#### a) オホーツク式土器

図6-2、3は胴部破片で、図6-5は胴部下半から底部にかけての破片である。

#### b) 後北式C1土器

口縁部破片で、帯縄文と微隆起線文が施文され

ている(図6-23, 24).

#### c) 宇津内IIa式土器

口縁部の内側から刺突され、外面に瘤が作出されている土器と、これがみられないものがある。図6-16の破片は部分的ではあるが、口唇部の外面に刻目と上部に縄の縄線文は施文されている。横位の曲線状に縄線文が5条施文され、下部に縄の端による押捺が施されている。図6-18は縦位の縄文が施文され、斜位の微隆起文が施されている。図6-21は口唇上に縄文が施文され、貼付文が施されている。地文は斜位の縄文で、口縁部に横位の縄線文が施文されている。図6-25は口唇上に縄文が施文され、外面に縦位の縄文が施文されている。図6-27, 28の口唇上にも縄文が施文され、地文が斜位の縄文となっている。図6-29, 32は同一個体の可能性がある。縦位の縄文が施文され、縦の微隆起線が施され、その上に刺突が施されている。図6-31には縦、横、斜めに区画された微隆起線が施されている。図6-33は胴部下半から底部にかけての破片で、地文に縦位の縄文が施文されている。上げ底である。

#### d) 宇津内IIb式土器

図6-26の破片は口唇上に縄文、口縁部に横位の縄線文が施文されている。図6-30は横位、縦位の微隆起線文が施され、縦位の縄文が施文されている。図6-34は縦位の縄文と、口縁部に横位の縄線文が施文され、下部に縄の端による押捺が2列施されている。縄線文は斜位にも施されている。図6-36は口縁部に横位の縄線文と、斜位の微隆起線文が施されている。図6-38は微隆起線文が斜位および横位に施され、その間に縦位の縄文が施文されている。図6-39は横位の微隆起線文が2条施され、その間と下部に縄線文が施されている。地文は斜位の縄文となっている。

#### e) 下田ノ沢式土器

図6-35, 37の破片のいずれもLとRの縄を2本1組として横位に押捺している。図6-37には補修孔が作出されている。

#### f) 続縄文初頭の土器

図6-4の破片は撚糸文が施文されている。内面からの刺突によって瘤が作出されている。瘤の間に外面からも刺突が施されている。図6-40は斜行、縦位に縄文が施文され、瘤の直下に円形の刺突が2個施されている。図6-40-42は口唇内面に縄文が施文されている。図6-43は口唇部に刻目が施文されている。図6-44は口唇直下に刺突が2個施されている。図6-41-43は縦位の縄文が、図6-44では斜行縄文が施文されている。また図6-43には、縦位の縄文の上に横位の縄線文が押捺されている。

#### g) 続縄文前半の土器

図6-17の破片が底部であるほかは、いずれも胴部破片である。地文として縦位の縄文(図6-6, 7, 10, 14, 20)、横位の縄文(図6-8, 9, 11, 12)、斜行縄文(図6-13, 15, 19, 22)が施文されている。19の外面にはベンガラが付着している。

## 2. 石器

包含層から石鏃、石槍、搔器、石小刀、砥石が出土しているが、時期については不明である。砥石を除いて、すべて黒曜石を素材としている。

石鏃は、基部が内湾するものと柳葉形のものが出土している(図7-1, 2)。石槍のうち、図7-3は半折している。図7-12も石槍と考えられるが、先端部と基部が欠損している。搔器は入念に側縁部が加工されたもの(図7-4, 5, 7, 9)と、分厚い素材を剥離したもの(図7-11, 13)、さらに剥片の側縁の一部を加工したもの(8, 10)がある。石小刀は側面の一方に挿入を加えている(図7-6)。砥石は凝灰岩製で、片面のみ使用されている(図7-14)。

## まとめ

既に述べたように、発掘区の西側は攪乱されていたが住居址の一部が検出された。床面(焼土中)の出土遺物から、時期は続縄文前半と推測される。ウトロ遺跡は、名称変更される前はウトロ砂丘遺跡と呼称され、ペレケ川右岸から東側に広がる海岸砂丘上に所在している。

表. 古文書におけるペレケ川の記載.

『元禄郷帳』(田中最勝 1958)		元禄 10 (1697) 年	ペリケ
『津軽一統志』(北海道 1969)		享保 16 (1731) 年	へるけ村 同 (狄) 八十人程 大将イクルヘカ
「西蝦夷地分間附図」 (函館市中央図書館蔵)		寛政 4-5? (1792-93?) 年	ペレケ 大船澗アリ…[後略]
「蝦夷国全図」(高木嵩世芝蔵)	林子平	天明 5 (1785) 年	ヘリケ
『蝦夷拾遺』(大友 1972)	佐藤玄六朗	天明 6 (1786) 年	ヘレケトマリ 繫船に風波の無憂入江あり
「松前蝦夷地之図」(高木嵩世芝蔵)	古川古松軒	天明 8 (1788) 年	ヘリケ
『寛文拾年狄蜂起集書』(高倉 1969)	則田安右衛門	寛政元 (1789) 年	一, へけるし 同断 (狄あり)
「『蝦夷国風俗人情之沙汰』付図」 (高倉 1969)	最上徳内	寛政 2 (1790) 年	ペレケ
『蝦夷巡覧筆記(松前東西地理)』 (函館市中央図書館蔵)	高橋壮四郎	寛政 9 (1797) 年	ペレケトマリ 当所ヨリシレトコ迄 岩山海ヨリ切立ニテ海岸通行成カタク山越モナクカイ送り場ナリ此処川有幅五六間当所小舟澗アリ
「蝦夷地絵図」 (東京大学史料編纂所 1984)	近藤重蔵	寛政 10 (1798) 年	ベケレ・岬処海…[後略]
「蝦夷地図」 (東京大学史料編纂所 1984)	近藤重蔵	文化年間 (1804-1816)	ペレケ
「松前蝦夷地嶋図」(更科源造 1955)	村上直之写	文化 13 (1816) 年	ベケレ
『蝦夷地名考并里程記』(佐々木 1988)	上原熊次郎	文政 7 (1824) 年	ペレケ 夷語ペレケとは, 則, 割れるといふ事. 此海岸に割れたる岩のあるゆへ字になすといふ
『蝦夷日誌二編』(秋葉 1999)	松浦武四郎	弘化 3 (1846) 年	エベケレ 夷人小屋二軒. 左右大岩 昼々にして中に小湾をなしたり. 合船懸り澗よろし. …[中略]…八丁式十間にしてウトルチクシ又岩岬
『手控午第七番』(秋葉 2007)	松浦武四郎	安政 5 (1858) 年	ウトルチクシ 番屋庫等有. 鱒番屋. 止宿す. 此処番屋うら十丁計も平地有. 其上ヘケレノホリまでつづき, 高山也. 前砂浜少し有. 前に図する如く島岩ニツ三ツ有, その間を通り行が故にウトロチクシと号るとかやヘケレ 本名ヘレケのよし. 小川有り

この遺跡は河野広道によって1949年、1951年に(河野1955; 宇田川1981)、東京大学によって1959年に(駒井1964)、2004年から2008年まで国道334号線改良にともなう緊急発掘調査が斜里町教育委員会によって継続しておこなわれている。また砂丘上には神社山と呼称されている標高30mほどの岩体が所在し、この岩体の西側に開口している洞窟が、1980年から2008年までに6回にわたって調査されている。さらにウトロ遺跡の東側となる幌別川右岸の幌別川口遺跡も、1979年に斜里町教育委員会によって発掘調査がおこなわれている(其田・河野1980)。

地名となっているウトロの初出は、安政5(1858)年、松浦武四郎による『手控午七番』のウトルチクシ(秋葉2007)と思われる。

それまでの古文書では未見で、発掘調査のおこなわれた西側を流れるペレケ川が古くから記載されている。管見した古文書による記載は表に示したとおりであるが、津軽一統志は寛文10(1670)年のシャクシャインの戦いの際の記録で最も古いと思われる。

ペレケイ、ウトルチクシについて永田方正は、「ペレケイ 岩ノ裂ケタル処」、「ウトルチクシ間の通路」と解釈している(永田1891)。また知里真志保は、「ペレケ川 ペレケイ(perke-i)。ペレケ(破れている、裂けている)イ(所)。岩が裂けている所。」と解釈している。またウトロについては、「ウトロ。原名『ウトルチクシ』(uturu-chi-kus-i)。ウトル(その間を)、チ(我等が)、クシ(通行する)、イ(所)。岩と岩の間に細道があり、そこを通つて部落から浜へ往来するするのでこの名がある」(知里1955)としている。ペレケが古文書や絵図に記載されているのは、この川の河口が大きな湾となっている地理的状况からであろう。

## 引用文献

秋葉実(翻刻・編)・松浦武四郎(著)。1999。校訂蝦夷日誌2。510 pp。北海道出版企画センター、札幌。

秋葉実(翻刻・編)・松浦武四郎(著)。2007。松浦武四郎選集5。522 pp, 510 pp, 227 pp + xxi。北海道出版企画センター、札幌。

宇田川洋(編)。1981。河野広道ノート考古篇1:北海道東北部の考古学的調査。253 pp。北海道出版企画センター、札幌。

大友喜作(編・解説・校訂)。1972。北門叢書1。410 pp。国書刊行会、東京。

熊木俊朗。1997。宇津内式土器の編年:続縄文土器における文様割付原理と文様単位1。東京大学考古学研究室紀要15:1-38。

河野広道。1955。先史時代史。斜里町史編纂委員会(編)、斜里町史。pp.1-75。斜里町、斜里。

佐々木利和(編)。1988。アイヌ語地名資料集成。543 pp + 29 pls。草風館、東京。

更科源造。1955。古文献に現はれた斜里。斜里町史編纂委員会(編)、斜里町史。pp.777-850。斜里町、斜里。

其田良雄・河野本道(編)。1980。知床国立公園・幌別川口遺跡発掘調査報告書。pl. + iii + 124 pp。斜里町教育委員会、斜里。

高倉新一郎(編)。1969。日本庶民生活史料集成4:探検・紀行・地誌(北辺篇)。821 pp。三一書房、東京。

田中最勝。1958。歴史時代篇。網走市史編纂委員会(編)、網走市史上。pp.283-1004。網走市、網走。

知里真志保。1955。斜里郡内アイヌ語地名解。斜里町史編纂委員会(編)、斜里町史。pp.851-872。斜里町、斜里。

東京大学資料編纂所(編)。1984。大日本近世史料近藤重蔵蝦夷地関係資料1。356 pp。東京大学出版会、東京。

駒井和愛(編)。1964。オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡下。193 pp + 96 pp + 80 pls。東京大学文学部、東京。

永田方正。1891。北海道蝦夷語地名解。498 pp。北海道廳、札幌。

北海道(編)。1969。新北海道史7史料1。1426 pp。北海道、札幌。

## 報告書抄録

ふりがな	しやりちょううとろいせき							
書名	斜里町ウトロ遺跡							
副書名	ウトロ東下水道工事に伴う緊急発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	豊原 熙司, 坂井 通子, 松田 功							
編集機関	斜里町教育委員会							
所在地	〒 099-4113 北海道斜里郡斜里町本町 12 番地, TEL 0152-23-3131							
発行年月日	平成 21 (西暦 2009) 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うとろいせき ウトロ遺跡	しやりぐんしゃ 斜里郡斜 里ちょうと ろひがし 口東 431 ばんち 番地	01545	1	44° 4' 16"	144° 59' 40"	平成 19 年 8 月 1 日 - 8 月 8 日	14.2 m <sup>2</sup>	ウトロ東下 水道新設工 事に伴う緊 急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ウトロ遺跡	集落趾	続縄文文化期, オホーツク文 化期	住居址 1 軒	続縄文土器, オホーツク土 器, 石器	

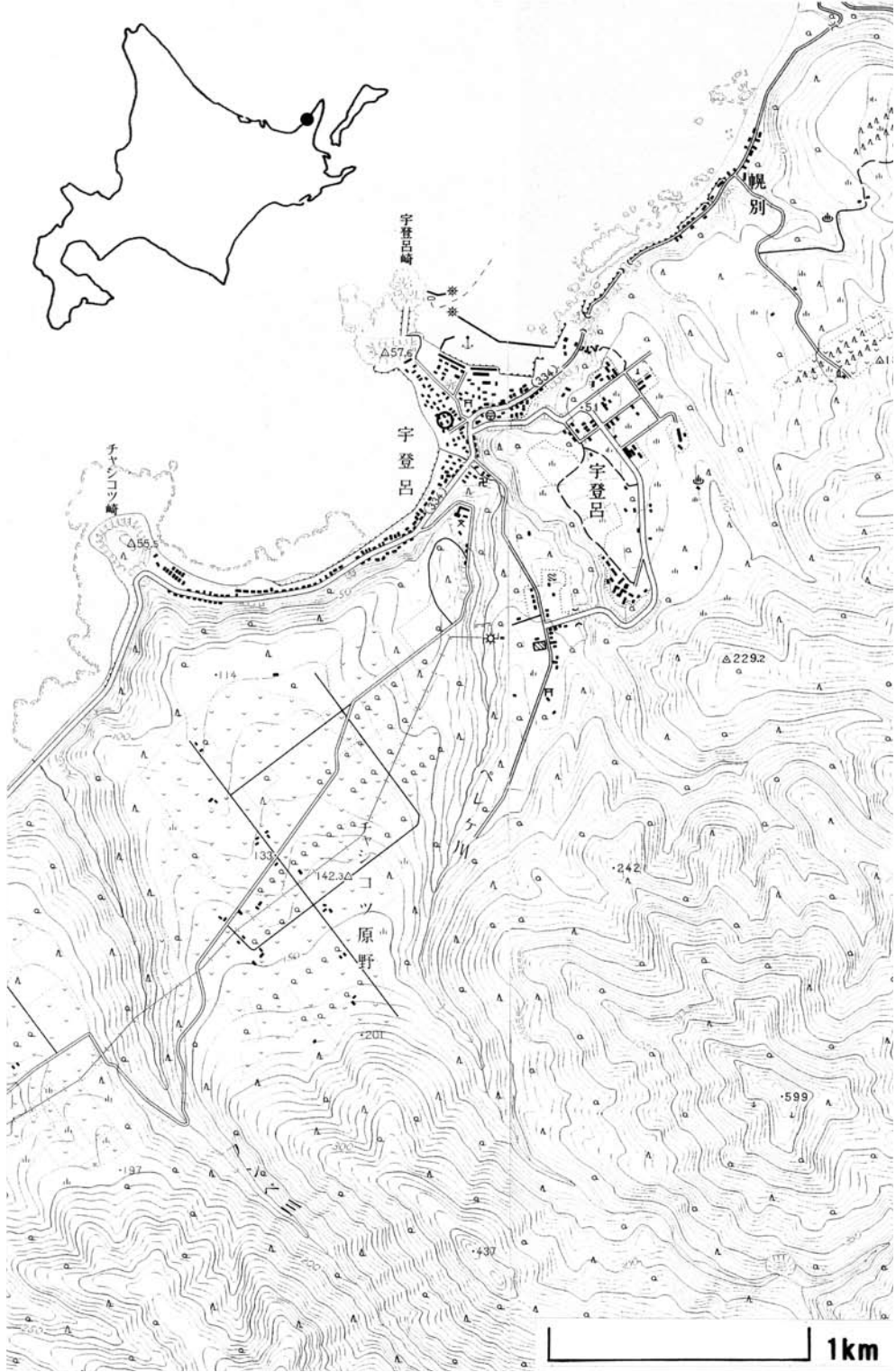


図 1. ウトロ遺跡の位置.

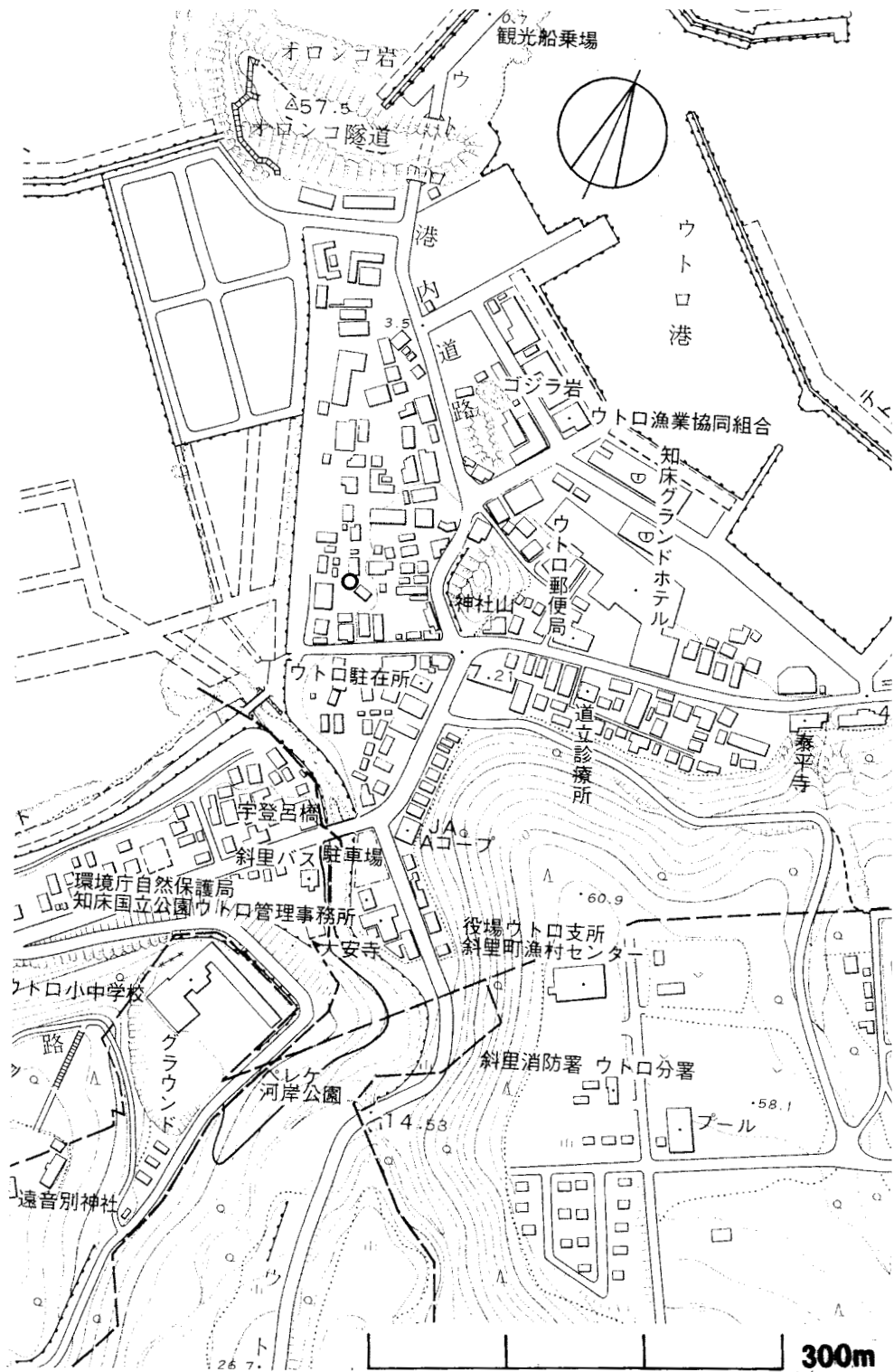


図 2. 周辺の地形と発掘区の位置.



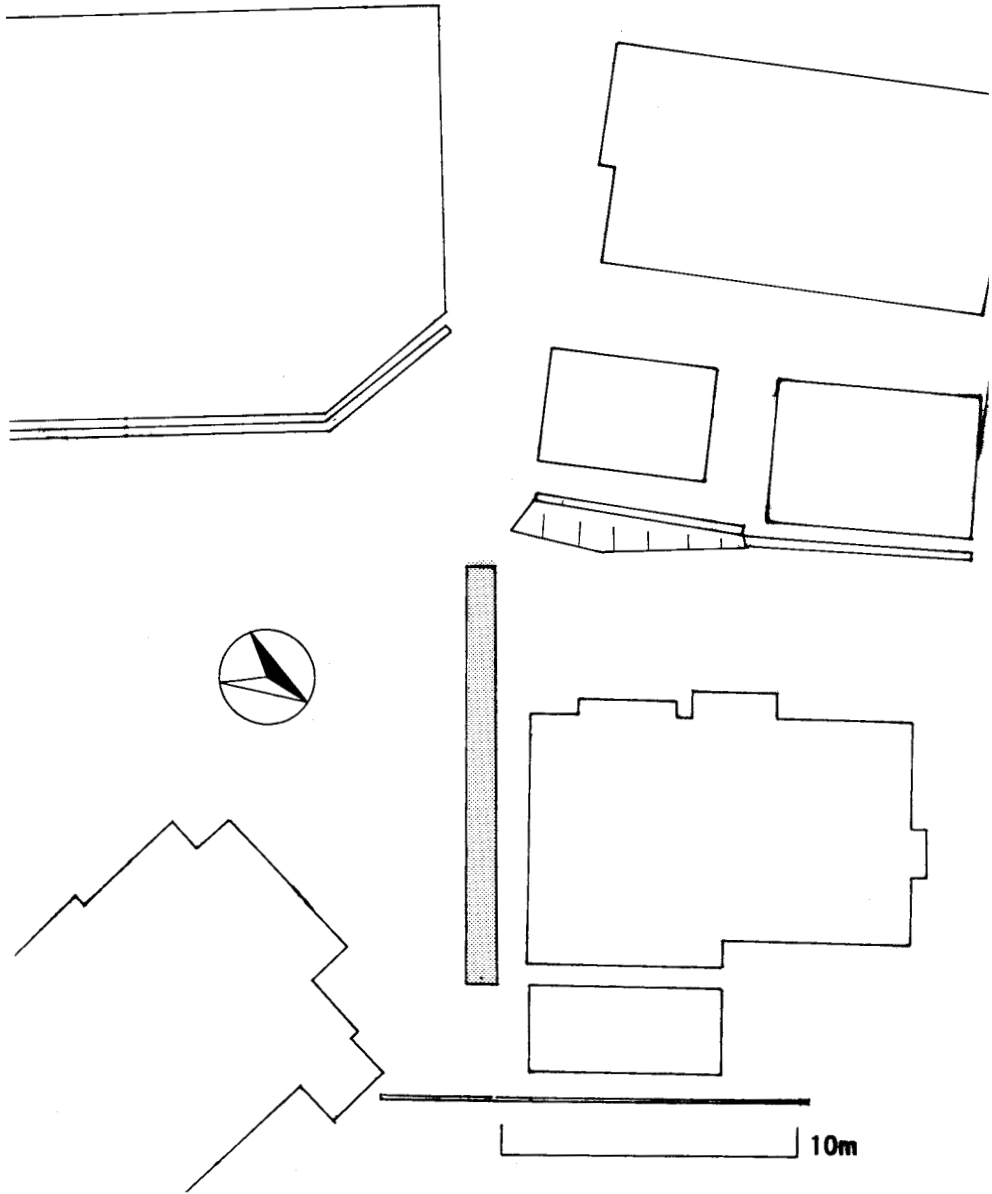


图 3. 発掘区.

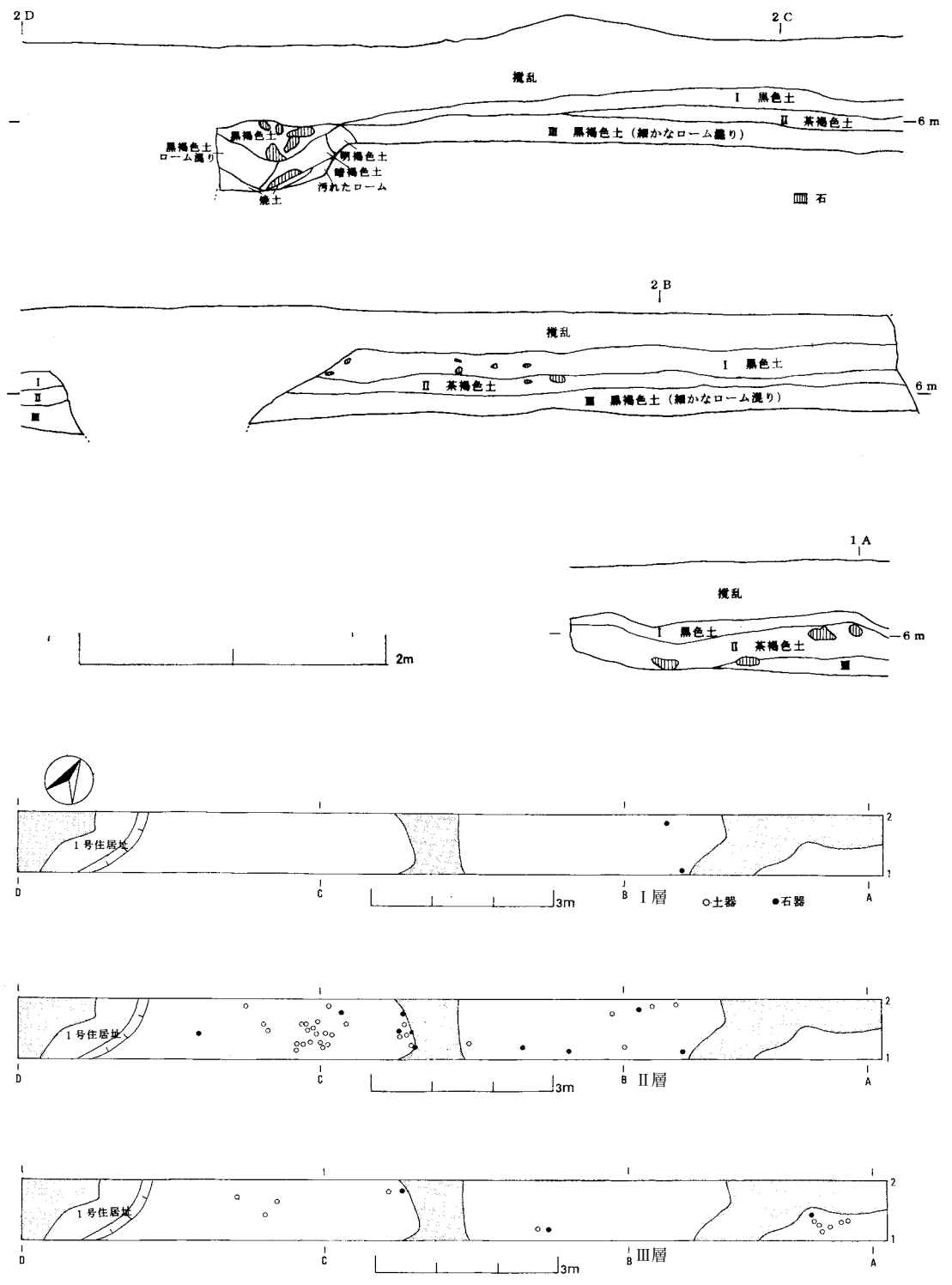


図 4. 土層図および包含層遺物分布図.

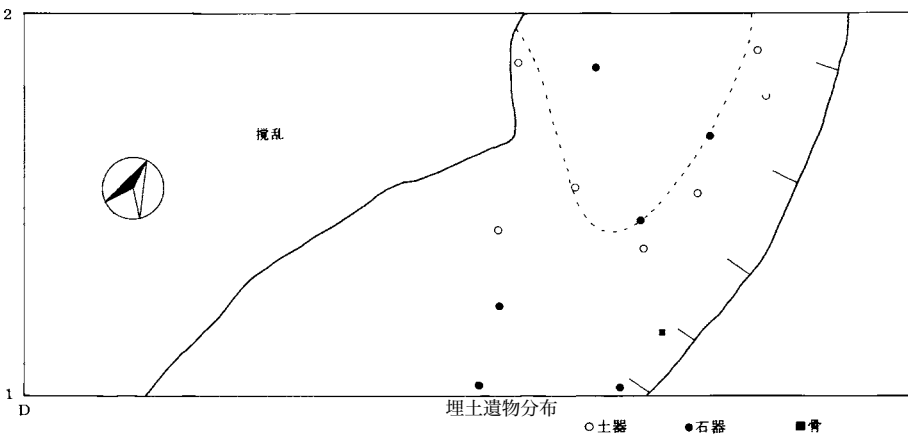
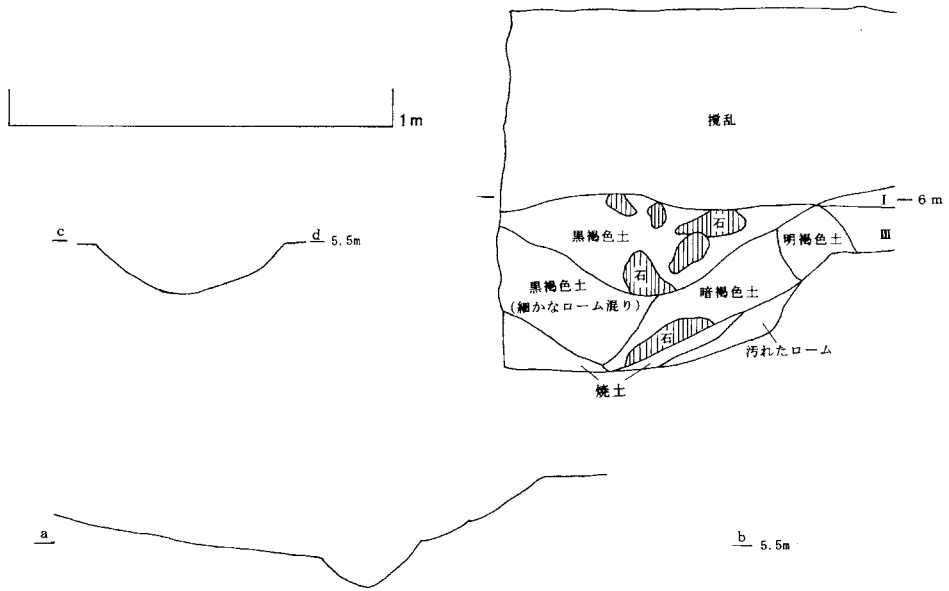
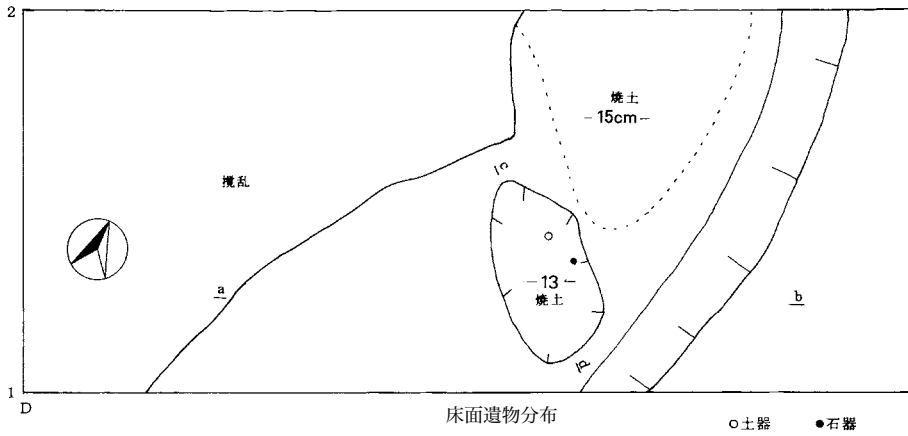


図5. 1号住居址.

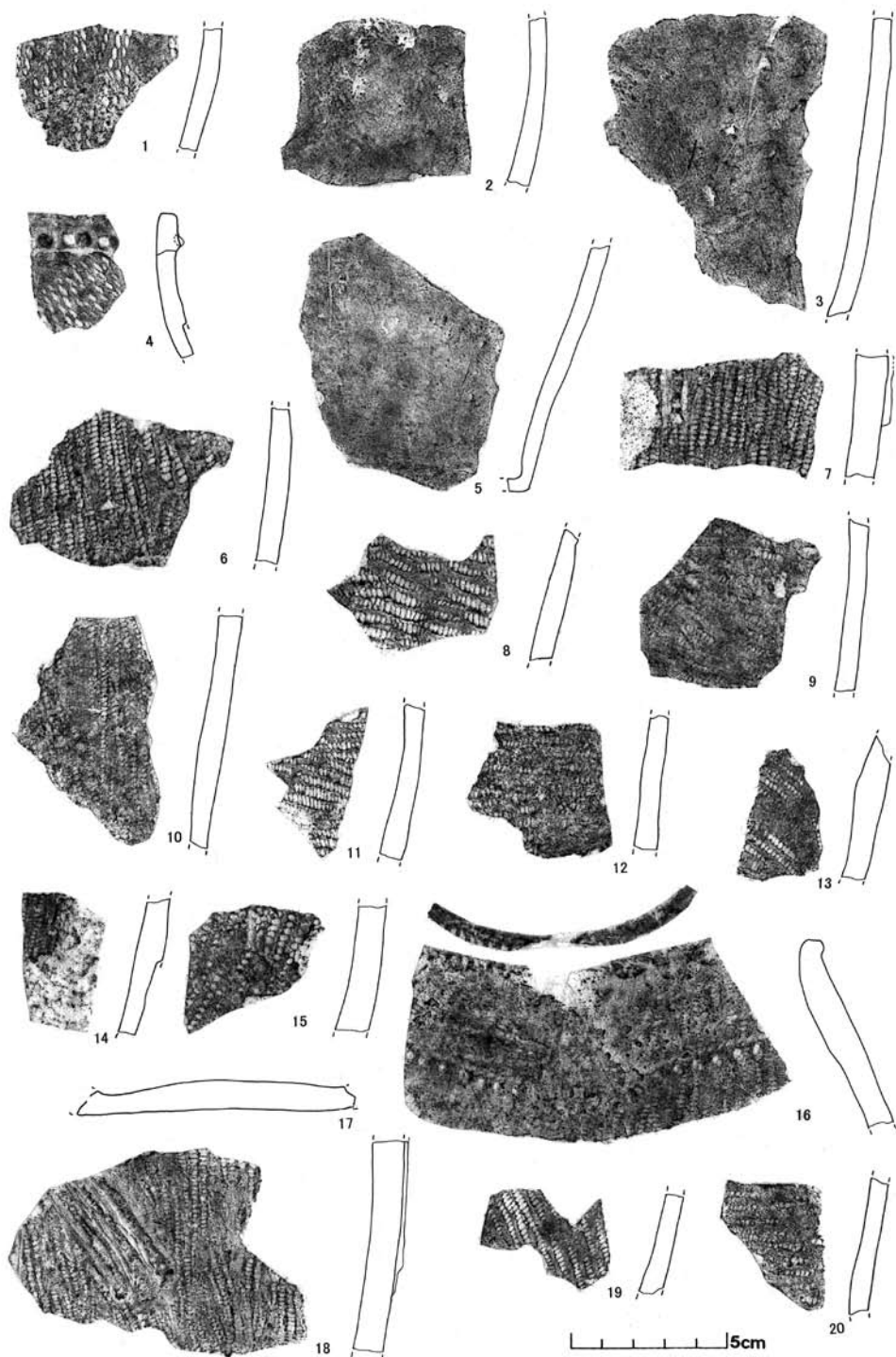


図 6. 土器.

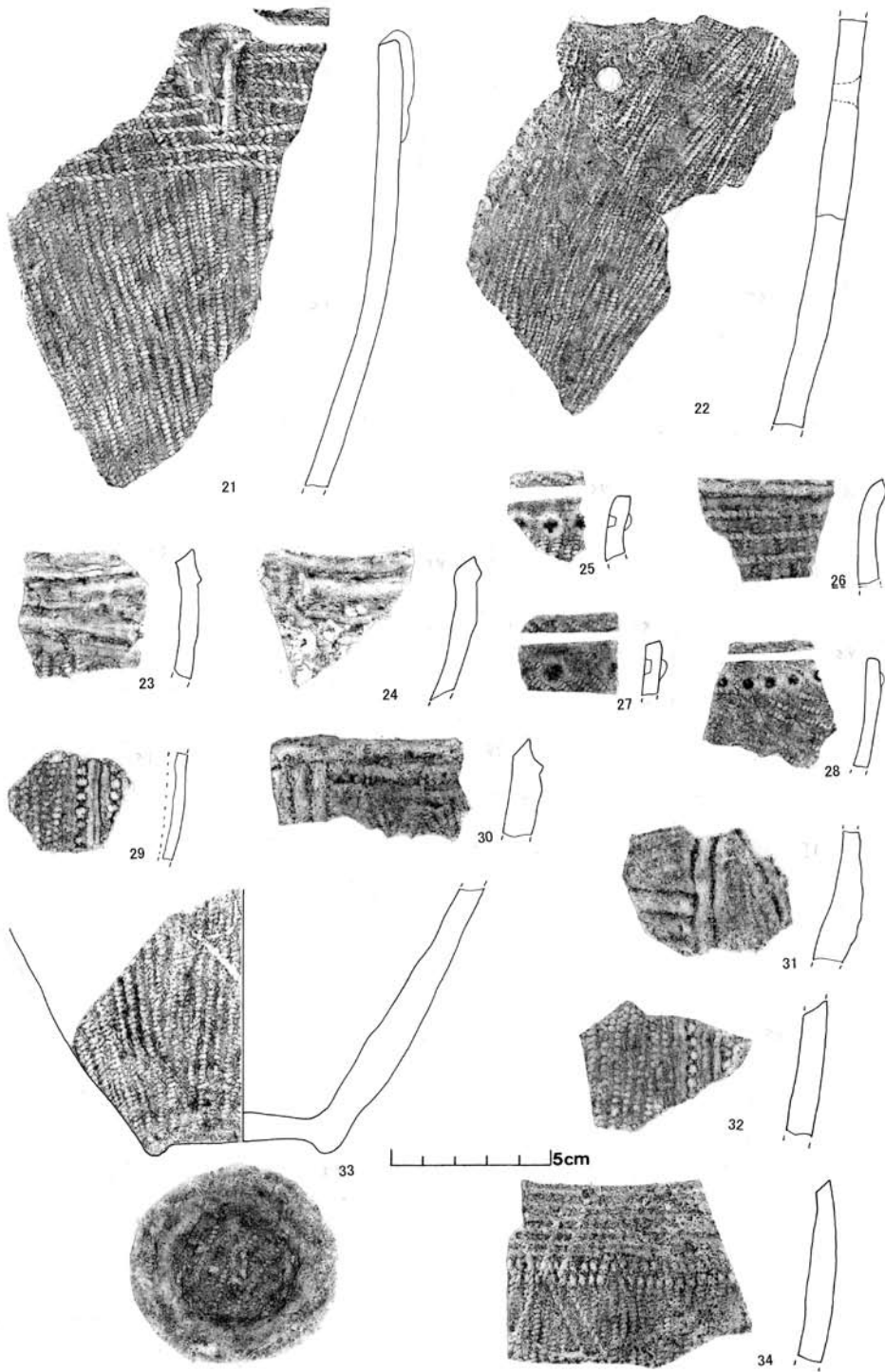


図6. 続き.

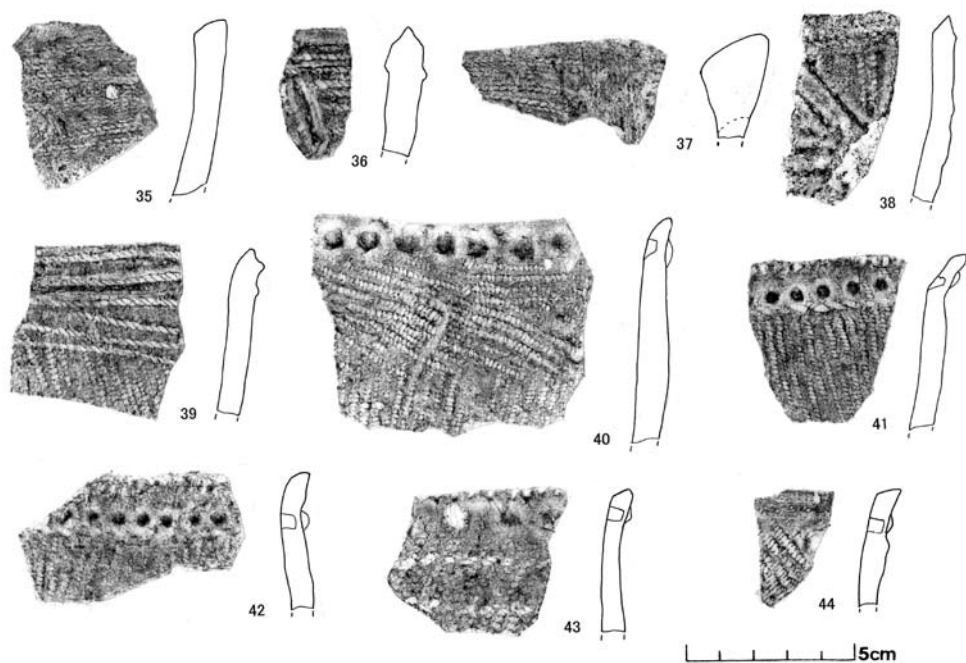


図 6. 続き.

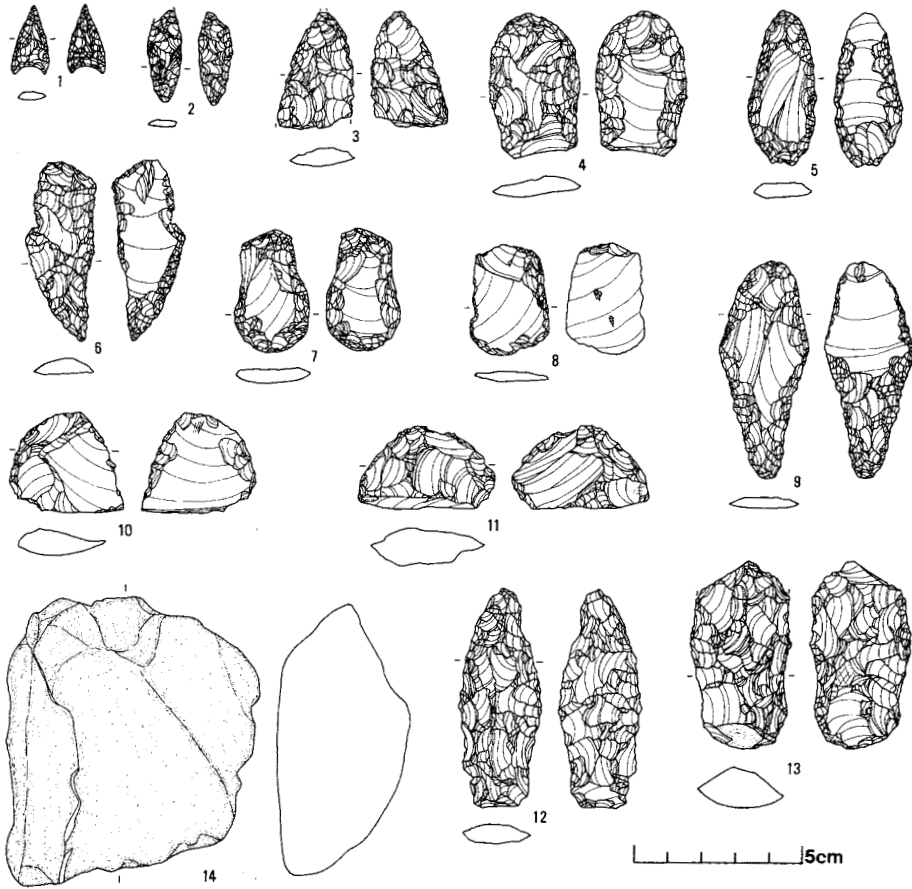


図7. 石器.



图 8. 上: 発掘区, 下: 1号住居址完掘状況.



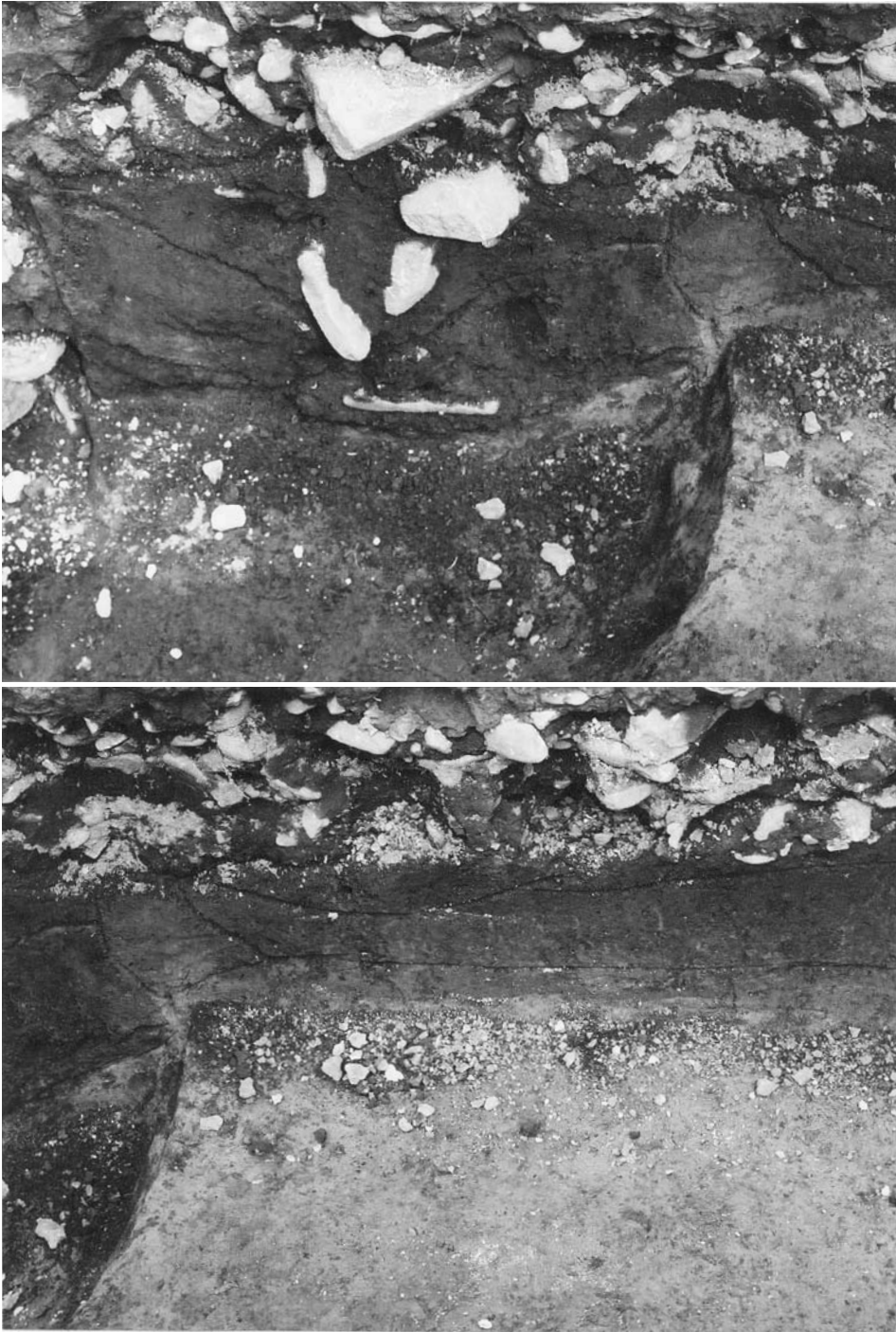


图 9. 上: 1 号住居址埋土, 下: 包含層.

